

トウモロメーカー

「健二さん、朝よ」

誰だ、あの声は。

「遅刻するわよ」

ああ何だ、京子か。自分の妻の声に一瞬とまどうとは。自分？あれ？俺は誰だ。何を言っているんだ。俺は石倉健二だろ。どうも頭が重い。深い眠りだったのかな。

「コーヒーでいいかしら？」

「ああ、どのくらい眠っていたのかな？」

「七時間くらいかしら、昨日帰ってきてシャワーを浴びたら倒れ込んでぐっすりよ」

疲れているのかな、何となく記憶もはつきりしないし。

「お仕事、忙しそうね、体に気を付けてよ。区長さんになったらもっと忙しくなるんじゃない？」

仕事。そう、もちろん忙しい。いよいよわがトウモロメーカー・コミュニティが自治区になるのだ。自分たちで運営する自治体なのだ。今年、二〇二四年は、未来を愛し、未来にこうとするわれわれにとって、特別な年になる。そして、俺は区長になる。うれしいことだ。だけど、そう、わかっている。本当に区長に相応しいのは、俺ではないのだ・・・

朝のハイウェイは気持ちいいものだ。トウモロメーカー・コーポレーションのオフィスはカナダのケベック州にある。地震やハリケーンなどの自然災害により患者長期保存センターなどの施設が被害をこうむる恐れがほとんどないからだ。クライオニクスの世界では、医学的・法律的には「死んだ」人体を、未来での復活の可能性を信じて「患者」と呼ぶのだ。「死体」という言葉は使わない。長期保存センターのわきを車で通りすぎる。もうすぐだ、もうすぐ、われわれのコミュニティが自治区になる。自治体としてかなり自由に運営できるコミュニティになるのだ。四年前、「コミュニティが三万人を越えたら考えますよ」とせせら笑った政府の担当者はいまどこにいるだろうか？ 四年で三万人を越えたことを伝えたら、何と言って驚くだろうか？ 確かに、クライオニクスは前世紀からクライジーなもので見做されていた。何せ人体をマイナス百九十六度Cの極低温で長期保存し、細胞の分子レベルの損傷をナノマシンによって修復し人体を蘇生させようという途方もない試みだからだ。しかし、今世紀になってから少しずつ状況が変わってきた。技術の進歩が明らかになったこと、さらに、俺のように、「未来をよきものにするために働き、自ら未来へ行く」という明確かつ崇高な目標を持って人生を歩む仲間がたくさん集まったからだ。われわれの三万人の仲間には能力の高い者、世の中での地位がある者も多く、「未来をよきものにするために働き、いっしょに未来へ行こう！」とのメッセージを発し続けたのだ。社会的な影響力も大きくなっている。当然、われわれは自分で運営できる自治体になってしかるべきなのだ。それが四年間で証明できたことは、何とうれしいことか。

トウモロメーカーに出会えて、本当によかった。我々は資本主義の世の中に生まれ、トウモロメーカーが設立されるまではとても不安定な状態で生きてきた。ひとことと言

えば、社会が悪かったのだろう。資本主義の社会では、他人を蹴落として自分の欲求を満たすのに何のためらいもない奴がのさばる。それに耐えられない人たちは落伍者になる。年間自殺者は前世紀末に三万人を越え、いまや五万人に手が届く、そういう社会なのだ。人生の勝ち組は金が欲しい、いい物を身に付けたい、いい家に住みたい、どん欲なまでに性を享受したい、そんなことを考えていて、負け組はひきこもるしかなかった。そんな時代に我々は育った。でも、俺はむしろまともだった。寝た女の数を自慢するような連中のなかで、俺はそれなりに悩んでいた。何とかしたいと模索していたじやないか。トゥモローメーカーが設立されてからは積極的に参加し、実績を挙げてきた。多くの素晴らしい仲間にも出会えた。うれしかった。ああ、でも、中でも最も素晴らしい仲間である雄一が、この俺の深い悩みを引き起こすとは思わなかった。

二

「室長、室長」

秘書からのコールでふと我に返った。習慣というものは恐ろしいものだ。車を降り、自分の机にすわるまで意識せずにやっている。今日もスケジュールはぎっしりだ。

「また、ボケっとしていたんですか？ 冗談は顔だけにしてくださいね。少しは後輩の新村さんを見習ったらいかがですか？」

「そつだな、優秀な彼なら美人で有能な秘書の選び方も知っているだろうからな、で、何だい？」

「十時からの新入会員の入会オリエンテーションはいつも通りでよろしいでしょうか？」

「そうか、しまった。忘れていた。」

「お忙しければ代理をお探しでしょうか？」

代理？ そうだ。雄一にやってもらおう。

「新村君に頼んでくれ」

「えっ、新村プロジェクトリーダーにですか？ 彼は室長以上に忙しいのではないではないでしょうか？」

「わかりました。お伝えします」

「先輩、俺でなければいけませんか？」

「ああ、すまん」

「わかりました、やっておきます」

相変わらず気のいいやつだ。能力も認めたくないが間違いなく俺以上だ。あいつが区長に立候補しなかったのは全く幸いだ。たぶん俺に気を使つてのことだろう。もちろん、あいつなら今後さまざまな実績もあげ、人が模範とするような魅力的な人生を過ごし、未来の仲間からも諸手を挙げて歓迎されるだろう。だが、俺には、トゥモローメーカー・コミュニティの初代区長という肩書きは必要だ。区長として働いてこそ、自分の満足も得られ、いきいきと人生を過ごし、未来の仲間喜んで迎えられるようになると思うのだ。本当は、

立場や能力に関わらず、ベストを尽くし、幸せに人生を過ごすことができればそれが理想だ。だが、俺は、残念だが、まだそんな強さは持っていないのだ。実際、トウモロメーカーを知るまでは、自分の弱さに負け、何度も人を傷つけた。それは俺だけではない、トウモロメーカーの主力メンバーの中にも過去に大きな罪を犯した者はいるのだ。そうだが、雄一だって間接的に緑を殺したようなものかもしれない。

あの時、雄一が京子を愛していると緑に告げたことは、緑にとっては死刑の宣告だったとも言える。緑が自殺した後、雄一は罪の意識に苦しみ、一生独身でいることに決めた。そしてそれは、やはり雄一を愛していた京子を苦しめることになったのだ。京子はその苦しみから逃げるように俺と結婚した。もちろん俺は幸せだった。しかし、結婚して一〇年たったも、まだ京子が雄一を密かに愛していることがわかる。わかるから、一〇年の間、俺の苦しみも年々強くなっている。今後、それがもつともつと強くなることに、俺は耐えられるだろうか？

もう十一時か、新入会員のオリエンテーションももう終わりに近いな、ちょっと覗いてみるか。

「それでは、最後におさらいをしておきましょう」

「よき未来社会を建設すること、再度確認しますがトウモロメーカーの目的はこの一点です。よき未来社会とは何か？ そんなことは現時点わかりはしない。しかし我々は未熟なりに、よき未来社会とはどのようなものか、一人一人描かなくてはなりません。そしてそれを何らかの形で表明し、その実現に向け、自らの役割を定め、実践していかなければなりません。もちろん、仲間と十分な議論をし、他の仲間がどのようなことを考え、行動しているのかをよく見たうえで、役割を定め、実践するのです。そして役割が終わったと自ら判断した人はクライオイクスの処置を受け、患者長期保存センターという船で未来に旅立ちます。第二の人生が待っているのです」

「第二の人生のために、私たちはみなさんに自分史を残すことを強く推奨しています。自分史を公開することは、今申し上げた『表明』にもなります。クライオイクスは、未来での復活を未来の人に託します。もちろん、トウモロメーカー・コーポレーションは保存されている患者、全員を復活させることをみなさんにお約束しています。これは、クライオイクスの第一世代のプロバイダー、アルコー生命延長財団やクライオイクス研究所から脈々と引き継がれている伝統です。しかしながら、トウモロメーカー・コーポレーションと契約をしても、法的には保存されている人は『死んでいる』状態です。契約は有効とはいえません。もしかしたら、トウモロメーカー・コーポレーションがみなさんが復活する未来になくなっていく可能性もあるわけです」

「とはいっても、未来社会が、持続可能であり人権が保障されている豊かな社会であれば、たとえトウモロメーカー・コーポレーションがなくなっても、患者は破棄されないのでしょう。きっと、誰かが私達を復活させてはくれるでしょう。そう考えたとき、クライオイクスの処置を受ける前にやるべきことは、未来社会を、持続可能で人権が保障されて

いる豊かな社会にするように努力したその努力のプロセスを自分史として残すことであると思っています。未来の仲間が、私達の自分史を読み、『この人は魅力的だ、未来を作ってくてくれた仲間だ。』と感じてくれることが復活の早道であり、私達自身も未来に溶け込みやすくなるのです。だから重要なのです」

「このとき、未来を作る努力の成果は、そんなに問題にならないと思います。未来の人々は、私達の能力を欲することはないでしょう。しかし私達の経験は未来の仲間にとっても貴重なものだと思うのです。だから真摯に努力したいと思います。しかし、やりすぎてすりきれてはいけないと思います。すりきれてしまった人間に、未来の仲間は魅力を感じないでしょう。トゥモローメーカーの仲間みなさん！ よき未来を作るべく、努力し、生き抜いて、それをぜひ自分史に残しましょう。もちろん、自分史がなくても、トゥモローメーカーの一員であったという事実のみで、未来の仲間は私たちを受け入れてくれるものと予想できます。でも、確実ではありません。復活の可能性を上げ、かつ、私達自身も未来に溶け込みやすくなるために書くのです。記憶の確保にも役立つでしょう。より大事なことは、『いきいきと』人生を過ごしているかを自分自身がいつも振り返る道具になるということです」

「いきいき人生を過ごす、ということと言い換えると、未来社会の建設に関わっていることに真から幸福を感じているか、ということです。見方を変えて言えば、自己犠牲の上に業績を積み重ねてはいかんとということです。自己犠牲、自分の身を粉にして自らを省みず働くというのは一見すばらしいことのようにです。ときには美しくさえあります。しかしトゥモローメーカーのような社会的な団体でこれを認めてはいけません。自分を犠牲にして進む人はいざれ他人にも自己犠牲を強いるようになります。それではいけない。幸福という少しおかげですが、よりよき未来社会を描き、その実現に向かって努力することに、確かな手ごたえと大きな喜びを感じているか、ということです」

いつもながら雄一は話が魅力的だな、参加者はみんな目を輝かせている。

「質問があります」

お、

「新村さんご自身は、どのように未来で生まれ変わりたいと思っていらっしゃるのですか？」

「こりやすごい食いつきだ、どうする？ 雄一。」

「いい質問ですね。それにお答えするには、未来の社会がどうなっているかについて、少しお話ししなければなりませんね。さきほど、どのような未来になるかはよくわからないと申し上げました。トゥモローメーカー・コーポレーションとしての公式見解はありません。しかしながら、我々はいつもこの話題を肴に酒を飲んでおり(笑)、なんとなく仲間内で一致している見解があります。それは、『開拓派』と『アート派』に大きく分かれるのではないかということです。まず大前提として、我々全員を復活させるほど余裕のある(笑)社会ですので、食べるために働く、ということはまったくなくなっているは

ずです。まだまだそのような社会の実現は先ですが、私たちトゥモローメーカーのメンバーが世界中で大きな役割を果たすことができれば、実現できるでしょう。すでにその兆候がはつきり現れています。私たちのメンバーは理想があり、目的があり、そのために協力しあっているからです。では、人々は何をするのか？ ひとつは、新天地を開くという取り組みがあるでしょう。これが、『開拓派』です。宇宙は広い、無限と言っている空間があり、それだけ機会があります。開拓派の人々は、無限の宇宙にでていくために、自分自身の脳、その構造や記憶をすべてコンピュータに移し変え、他の惑星を目指します。自分をコンピュータに移すことは『マインド・アップロード』と呼ばれ、前世紀からSFの世界では有名でした。それも、経皮的に挿入できる大きさの長期埋植デバイスの実現が近づいたことで、そのデバイスから得られる数千億の微弱信号を神経活動パターンに変換するアルゴリズムができれば、技術的に可能となる見込みになってきています。想像できますか？ 数千億のナノレベルのデバイスが我々の脳に内視鏡のように注入され、そこからの情報が高速コンピュータで処理され、われわれの存在がコンピュータに移っていく姿を！ とても興奮しませんか？ 私も興奮しました(笑)、話を戻しましょう。では、コンピュータに心に移したわれわれはその惑星で何をするのか？ 例えば、その惑星に生命を宿し、育てることに喜びを見出すということは、きっとあるでしょう。育てたものが行く『創造』を見るのが、生きる楽しみの大きなものになります。そう、神になると言ってもいいかもしれません。もうひとつが『アート派』です。これは、母なる地球にこだわり、人間の姿にこだわり、人間の能力の限界にこだわり、その制限の中で永遠にアートを生み出すことを目的に生きていく人たちです。音楽でも絵画でも演劇でもいい、新しいジャンルのアートもあるでしょう。もちろん、他にもいろんな生き方がでてくるでしょうが、大きくはこの二つに分かれると考えています」

うん、俺は開拓派かな。雄一もそうかな。

「私は、自分はアート派だと思っています。やりたいことも、一つは決まっています。それは、『死』をテーマにした音楽の創作と演奏です」

え？ そうなのか・・・知らなかった。

「さきほど、自分史のところ、未来の仲間から見て魅力的な人になる、ということを示し上げました。私は、そのために取り組んでいることがひとつあります。それが『死』をテーマにした音楽の創作と演奏です。われわれがよみがえる時代の未来社会は、事故でしか人が死なくなっているはず。それもめったにありません。ですから、人がすべからず死ぬことが前提であった社会の、『死』に関する芸術は未来社会ではとても貴重なものになるだろうと思っています。そこで、私は、古今東西のレクイエム(鎮魂歌)を始めとする死にまつわる音楽を勉強し、数多く歌って身に付けており、多くの曲は指揮もできるようになっていきます。実は最近、トゥモローメーカー・コミュニティの有志を募って音楽・器楽アンサンブルを作りました。もちろんみんな、『死の恐怖』を知っている人たちです。この、死の恐怖を知っている人たちの演奏は、未来で大きなニーズがあるのではないかなと思っています。未来での、死の恐怖を知っている人と知らない人の共演も面白いだろうなあと考えています。みなさんも、入会して落ち着きましたら、ぜひ未来で何ができれば喜ばれるか、考えてみてはいかがでしょう？ アンサンブルへの参加も、

大歓迎ですよ」

うーん、すごい。雄一はそんなことまで考えているのか。かなわない。まずは俺との差は開く一方だ。やはり・・・自信がない。京子と雄一と、これからまだ長い生活を、平穏な心で送れるだろうか？ すでに心の中で大きくなってしまった不安、そう、いつか京子が雄一のもとに走るのではないかと不安、そして嫉妬、雄一の才能と人格への嫉妬・・・心配だ・・・あ、大きな拍手・・・オリエンテーションが終わったな。この短い時間でも、雄一は多くの人々の心をつかんだ。最初は俺が区長になるとしても、すぐに、雄一にとって代わられるかもしれない。奴に野心がないのはわかっている。でも、きっとそうなる。そのとき、俺は平穏でいられるだろうか？

三

「先輩、もういいですか？」

「いかん、つい考え込んでしまった。」

「わかった、今いく。雄一、ちょっとのぞいたがとてもいいオリエンテーションだったぞ。大したものだ」

「冷やかさないで下さいよ。俺のほうは書類まとまっています。先輩のほうはどうですか？」

「できてる、じゃ確認しよう」

会議室に急ぐ、忘れる、今は忘れるんだ。雄一への嫉妬も不安も。まず、自治区設立申請をきちんと完成させないと。今日は提出書類の最終チェックなのだ。

「室長、お待ちしていました」

「コア・メンバーがそろっている。プロジェクトの精鋭たちだ。」

「書類はそろっているな、ではレビューをはじめよう」

米国ほどではないが、カナダでも住民合意によって自治区を作ることは容易だ。そうはいっても、クライオニクスという、自分の死体を未来への復活を期待して低温保存することとコミットした人々、世間的に見ればかなり「怪しい」人々たちによる自治区の設定については、政府もかなり難色を示した。政府から与えられた課題をひとつひとつ解決し、いよいよ今日作る書類を提出すれば、自治が認められるのだ。間違いがあってはならない。

「問題なし、これでレビューを終了します」

みんな、大きな安堵のためいきをついた。クライオニクスでは法的に死んだ人を生きたと同様の人権を認めて保管する。そのための法的整理は大変なものだった。どうやら乗り越えることができたようだ。また、どのような場合は生きたまま保存することができるかの法的整理も同じ程度に難しい課題だった。結果は難病や老衰で脳細胞の破壊が著しくなってきたと医師が診断したときのみ、生きたままの保存を認める条例になった。仲間たちの長く、真摯な努力の成果だ。

「明日、新村君と私で自治省にいく、みんな、よくやってくれた。新村君はちょっと私の部屋にきてくれ」

「まあ、コーヒーでも飲みながら書類のパッキングをしよう。何とか仕上がったな」

「先輩も本当にお疲れさまでした」

「オリエンテーションでの『アート派』の話もよかったな。今度設立する自治区が成長して、アート派のコミュニティになる、というわけだな」

「そうなればいいと思っています」

「しかし、音楽の話も面白かった。アンサンブル作っているんだって？」

「え？先輩ご存知ないのですか？最初は京子さんも入っていたので、当然話はご存知と思っていました。先輩はオンチなので誘いませんでした。ごめんなさい」

え、何だつて??

「いや、知らない。何でかな？」

「最初の数回練習に来ましたが、その後、やっぱりやめられて連絡来しました。理由を聞いても教えてくれないのですよ。先輩、今度、わけを聞いておいてくださいよ」

「ああ、聞いてみるよ」

何故、俺は知らないのだろう・・・京子と雄一は、大事なものを共有している。とても不安だ・・・う・・・胸が苦しい。

四

あ、電話……。

もう朝か、けだるい、今日はさすがに仕事しないとな。何日もさぼってしまった。お、京子のやつ、いい表情で話しているな、俺の前であんな笑顔はめったに見せたことはない。相手は雄一か？

「健二さん。具合はどう？」

「いま、雄一さんから電話あったわ。大仕事が終わったのだから、ゆっくり休んでくださいって」

やっぱり雄一か、ああ、でも、やはり、聞いておかないと・・・たいしたことじゃないのかもしれないし・・・

「京子」

「何？」

「お前、雄一が作ったアンサンブルに入っていたんだって、で、すぐにやめたんだって？」

「そりゃ、お前の時間、どう使ってもらってもいいが、何で教えてくれなかったんだい？水くさいじゃないか」

「……………」

「京子、どうした？」

沈黙が怖い・・・雄一との間で、何か後ろめたいこともあるのか。

「……………」

え？

「雄一さんの考え方、とても素敵と思ったわ。そして、正しいわ。あたしも、以前歌っていたから、『死』がテーマの音楽を勉強して、未来で演奏してみたいと思ったわ。あなた

に最初言わなかったのは、あなたを驚かせたいと思ったの。美しい曲を見つけたのよ。練習して少し歌えるようになってから、あなたに聴いてもらって、喜んでもらおうと思ったのよ」

「いいじゃないか、うれしいよ。それが、何で『ごめんなさい』なんだい？」

「それは・・・」

「・・・京子・・・」

「そのアンサンブル、シェパードさんが代表なの。で、シェパードさんはそのアンサンブルを政治的な目的を達成するために利用しようとしたの。シェパードさんはあたしには言わなかったけど、あたしもすぐにその目的を知ってしまったの。で、やめることにしたの。」

「どういう目的なんだ」

「・・・」

「教えてくれ」

「今度の区長選で、雄一さんを擁立するって・・・」

「何だって!」

「シェパードさんは、悪気はないんだと思うの。純粋に、このコミュニティの長は、雄一さんがいいと思っているの。新村さんは石倉さんに遠慮していつも石倉さんをたてているが、能力・人格ともに、区長にふさわしいのは新村さんだ、いつももおっしゃるわ。それに、多くの人が賛同したの。さつき、政治的な目的って言ったけど、後ろ暗い政治談議をしているわけではなく、雄一さんのファンクラブに毛が生えた程度なのよ、でも、あたしはそこにいることはできなかった」

「雄一は知っているのか？」

「知らないと思います」

何てこった、シェパードの奴、とんでもない。いや、シェパードだけではない。

「どんな人たちがそこにいるんだ？」

「ハルペンさん、ベッカーさん、天方さん・・・あと、ガスパーさんとか・・・」

キーパーソンばかり・・・そいつらが、みんな雄一のほうが適任だというのか。どうすればいい?? いや、自分でも、雄一にかなわないことはわかってた。ちゃんと受け止めなければいけない。いけないんだが・・・

「本当にごめんなさい」

「いや、君は何も悪くないよ」

そう、悪くない。悪くないけど・・・

「京子。今でも雄一を愛しているのか」
しまった。言うべきでないことを・・・

「何てことを言つもの。私はあなたの妻よ。あなただけと生きて行くことに決めています。でも・・・」

「でも何だ」

「それは・・・雄一さんがすてきな人だからです。でもあなたもすてきな人。一緒に暮らしているのに何でわからないの？」

「では俺を一番愛しているのか？」

「あなた疲れているわ。休んだほうがいいわ」

「答えろ！京子」

「当然です！ 健二さん、本当にもう休んで」

大人げないことをした。そうとも、わかっていたことじゃないか。京子は心底雄一を愛していた。雄一との別れた後のつらさに耐えられず、俺と結婚したんじゃないか。わかっていたことだ。何を今さら。

「悪かった、京子。コーヒーでも入れてくれ」

俺も雄一が好きだ。あいつはすばらしい。しかしこの嫉妬心は抑えられそうもない。雄一がいなければこんなことにはならなかった？ いや、雄一に助けられなければここまで来れなかっただろう。そんなものさ。

えっ・・・雄一がいなかったら・・・？

恐ろしい考えが急速にわきあがって来るのを抑えることができなかった。雄一がいなかったら。いや、もし今、雄一が死に、俺が雄一の穴を埋めて懸命に働き、周囲の俺を見る目が変わり、京子もこれからの一生を雄一のいない分、俺に支えられて生きたとしたら、きっと俺の人生は変わる。そう、雄一が今死ねば・・・何てことだ！ 雄一の死を願うとは！

「あなた、コーヒーがはいったわ」

京子、いくつになっても本当に美しい。俺のオアシスだ。でも・・・でも・・・雄一がいるとこの女性は俺を心から愛してくれることはないかもしれない。しかし、あいつがいなければ。

去れ！悪魔よ。このような考えを頭から追い払え。いつも俺を助けてくれた男の死を願うとは。もしかしたら俺はあいつを憎んでいるのかもしれない。でもそれ以上に愛しているはずだ。こんなつまらない考えを追い払うのだ。

「京子。さっき言ってた、『美しい曲』は、もうすっかり歌えるのかい」

「ええ、だいたいは」

「聴かせてくれよ、弾き語りで」

「弾き語りは無理よ、でも、大丈夫よ、練習用の音源あるから」

“ 我は裸にて母の胎を出でり、また、裸にて彼処に還らん、主のみ名は誉むべきかな
・・・ ”

ああ、美しい。何て心が洗われる。明るさに満ちた京子の声、そしてオルガン。音源と合わせているのに何と息の合った演奏だろう。すばらしい。これこそ今の俺に必要なものだ。京子・京子・。頼む、俺を支えてくれ。雄一にいつか追いつけるように。雄一、俺はおまえにないものを持っているぞ。この美しい歌はどうだ。京子は俺のために音楽を奏でる。この音のように俺も浄化されよう。

「京子、ありがとう、泣けちゃったよ。オルガンだけの音源なんてよく持っていたね」

京子の次の言葉は心底聞きたくないものだった。京子は悪くない。ちょっと無神経だっただけ。でも、俺はその言葉で生まれて初めて人を呪った。

「ちょっと言いにくいけど、このオルガンを弾いているのは、実は雄一さんなのよ」

五

もう俺はだめかもしれない。雄一を憎んでいる。死ぬことさえ願っている。雄一が死に、俺がその分トウモロミーカーと京子に尽くせば、きっと俺は救われる。もちろん、こんな考えを頭から追放し、すぐにでも地道な努力の日々を積み重ねていくべきだ。そんなことはわかっている。でもできないのだ。「雄一が死ぬば」。この一言が頭をかけめぐっている。もちろん、自分で殺すことなどできやしない。苦しい。もう何日もこの状態だ。自治区設立業務が進まない。ありがたいことに雄一たちはちゃんとバックアップしてくれている。何とか立ち直らなくては。

「室長、佐伯セラピストがお見えですが」

ああ、先週、カウンセリングをキャンセルしたな。せざるを得ない。こんな状況で瞑想に導かれたら雄一に殺意を持っていることまで告白してしまいそうだ。

「丁重にお断りしてくれ。」

「そう言わずに一目だけでも会ってくださいな」

ああ、来てしまったか。

「すみません、先生。どうも精神状態がよくないのです。先生にご相談するのがいいとは思いますが、何だか自分を見失うような気がするのです。申し訳ありませんが出直していただけませんか？」

「石倉さん。カウンセリングということではなく、お茶でも飲みましょうよ。私も喉がかわいたから十九階の喫茶室でコーヒーをいただくことにしますので」

「そうですか、そこまでおっしゃってくださるなら」

気分転換にいいかもしれない。美しい景色でも見ながら美人の佐伯女史の声でも聞けば力が湧くかもしれない。話してみよう。

「先生、しばらくです。先生の普段着姿をはじめて見させていただけますが、よくお似合いですね」

「ありがとうございます。心配してましたのよ。お顔の色はよろしいわね」

「先生、さっそく診断しないでくださいよ。お茶を飲みにいらしたのじゃなかったのですか？」

「ごめんなさい。奥様はお元気？」

他愛のない話が三十分も続いただろうか。

「それではそろそろ失礼いたしますわ。思ったより元気そうなので安心しましたわ」
心にもないことを、しかしありがたいことだ。

「石倉さんのような方には失礼かと思いますが、一つアドバイスさせていただきます」

「いえいえ、お願いします」

「トウモロローメーカーの新入会員の方に多いのですが、私もトウモロローメーカーの会員だからかえって心を開けないことがあるんです。そういう場合、会員でないセラピストを紹介することになっているのです」

「そうですか」

「もしよろしければと思って今日はそういう人たちの連絡先をお持ちしましたわ」

「ありがとうございます。みんな信頼できる方々ですか？」

「もちろん、守秘義務を貫けなくてはセラピストは務まりませんわ」

「先生には大変失礼ですが、もしお世話になるとしたら、どの人がいいでしょうか？」

「そうですね。今まで紹介した会員をほとんど直してしまった人がいるのです。一人だけ治療の途中で自殺してしまった人がいるけど。私の昔の仲間なのです。そのコツを聞いたこともあるんですけど、教えてくれません」

「企業秘密でしょうから」

「ヴェーヌスの名でセラピストをやっています。昔から変な人だったけれど、実力は抜群で私もちょっとかなわないんですの」

それはおもしろい。もしかしたら突破口が見つかるかも知れない。そういえば、ヴェーヌスってワーグナーのオペラ「タンホイザー」の役柄だ。タンホイザーを惑わす肉と性愛の女がヴェーヌス。敵役のエリザベートは清らかな愛の象徴、エリザベートが佐伯セラピストだな。

「ありがとうございます、すこし考えさせてください。先生、その人がヴェーヌスならあなたはエリザベートですな」

「お上手ね。またご連絡しますわ」

ヴェーヌスの家はオンタリオ湖の近くにあった。タンホイザーのヴェーヌスの住み家は確か山の洞窟だったな。どういうつもりでこの人はセラピストとしてヴェーヌスの名前を使っているのだろう。男を誘惑してとりこにするどころか、トウモロローメーカーの会員を何人も治してくれているのだから。

「先生、お電話した石倉ですが」

「お待ちしていましたわ。どうぞ」

電話したとき、なまめかしい声がちよっと意外だったが、会ってみるとこれが驚きだ。胸の開いたドレス、背中も隠していない。この色っぽさは確かにオペラ「タンホイザー」のヴェーヌスそのものだ。

「どうなさったの？」

「いえ・あまりに美しい方なので驚きました。その・・・」

「セラピストらしくないとおっしゃるのかしら？」

答を待たずカウンリング用の部屋に案内された。やはり趣が違う。佐伯セラピストの部屋にはムリリヨやグレコの聖母像がかかっていたがこの部屋はトリスタンとイゾルデだ。

「恵子との違いに驚いているの」

「恵子・・・ですか？」

「佐伯恵子のことよ。彼女とは以前同じ師のもとで学んだのよ」

「そうだったんですか」

「彼女は人をよき方向、何がよくて何が悪いかわかりやしないけど・・・よき方向に導くことに生きがいを感じているのよ。でも私は人間の本質を浮かび上がらせることに興味を持っていて。そして、それはたいい美しくない」

「そう聞くと安心します」

「彼女は私から見れば偽善者だわ、あまり好きではないの。私は私なりに本質を求めているの。その方が正直でしょう。恵子は私より美しく、それを自覚しているくせに表に出そうとしないのよ。正直じゃないわ」

「あなたががんばっているトゥモローメーカーも、人間の本質を善であるはずだ、と決めつけて活動しているわね。好きじゃないわ。私のところにくるのはそのことに悩む人たちよ」

これは安心できそうだ。

「さあ、気を楽しにして、すべてをお話しなさい」

どれくらい時間がたっただろう。すべて洗いざらいしゃべった。雄一のこと、京子のこと、嫉妬と不安、泣きながら訴えた、子供のよう。そのまま泣き疲れ、眠ってしまった。

「お目ざめかな、坊や？」

ヴェーヌスの優しい表情がそこにあった。

「みっともない姿をお見せしました。いやお恥ずかしい」

あれだけ泣けばとりつくりようがない。

「いいえ、とても正直だった。あなたが好きになったわ」

気軽にキスしてくる。とても自然に。

「あなたが眠っている間に対策を考えたわ」

「本当ですか。教えて下さい」

「やはり答はあなたが思っているとおりのよ。雄一という人がいなくなればいいのよ」

「それはわかっているのですが・・・」

「殺してしまいなさい」

「何てことを！殺すだって。何と罪深いことを！」

「何が罪深いのか？ 私は人間の本質を善か悪か見極めていない。その存在がよきことか悪しきこともわからない。生きることが幸せか不幸かもわからない。人を殺すことが罪だというのは人が作った社会の要請としかとらえられないのよ。自然界では優秀な遺伝子を残すために殺し合いをするのが普通よ。私たち人間も他の生命の犠牲なしには生きられないわ。なぜ人間だけが特別なルールなの。私は、全然罪深いとは思わない」

佐伯セラピストの言ったことがだんだんわかってきた。本当に規格はずれの人の人なのだ。

理屈はわからないでもないが、俺はノーマルだ。とてもつきあえない。」

「あなたはそれでいいかもしれない。しかし俺にはそんなことはできない」

「本当？ 殺意は確かにあったわよ」

「そうかもしれない・・・しかし」

「自分で手をくだせないの？ だったら私に会わせてよ。暗示をかけて自殺するように仕向けてあげるわよ」

怒りに似た感情が沸き起こってきた。気が付いたら怒鳴っていた。

「あんたそう言うけど、俺の記憶にはあんたに殺人を依頼したことがずっと残るんだ。そうしたら、俺は長い人生、それを抱えて生きていくんだぞ！」

「忘れさせてあげるわよ。私に会ったことすらもね」

顔から血の気が引くのがはつきりとわかった。そうか、そうだったのか。

「トウモロメーカーの会員を何人も直したと聞いていたが、実は記憶を消していただけだったのか」

「だけ、ですって？ バカにしないでよ。本当にそれしか方法がないときだけよ。私には既存の道徳や倫理は関係ない。それしか方法がないから消してあげているのよ。みんな幸せに見えるわ。それが彼らの望んだこと、私はただ手を貸しただけよ」

反論できない。そうなのかもしれない。

「本当に消せるのか？」

「痕跡も残らないわ」

本当か？ もし本当だとしたら・・・いや、やめるんだ。冗談じゃない。

「帰らせてもらおう」

「あなた、もうずっと幸せになれないわ」

「・・・」

「一生後悔するわよ、よく考えて、決心したらまた来てくださいな。それから一つ注意しておくけど、私のことを誰かに話そうとしないほうがいいわね。命の保証はできないわ」

「何だと？」

「自ら命を絶つことになるでしょうね、一人そういう人がいたわ」

佐伯セラピストが言っていた自殺した男のことか。

「あんた、本物のヴェーヌだな。魔女だよ」

「違う！ 私は人間の本质を知りたいだけ。ただそれだけの女よ。あなた達の本当の姿を写す鏡だと思ってもらえればいいわ」

「・・・」

「連絡待ってるわ。結論がどっちでもあなたの記憶には何も残らない。できれば殺さないうって言って欲しいわ。その分、人間の本质に希望が持てるわ」

すでに勝負はついていた。ヴェーヌス、すまないな、俺はきつと君の希望の灯を一つ消すことになる。

六

決心まで時間はかからなかった。教会へ行った。生まれてこのかたないほど熱心に神に祈った。しかし答はなかった。神は殺人を犯すであろう俺を止めなかった。二日後にヴェ

「又スは俺の家に来た。」

「残念だわ。私はきつともう少して人間に絶望するわ」

「自分で誘惑しておいて何を言う」

「誘惑なんてしてないわ。私は知りたいただけ」

「魔女め」

「その魔女を呼んだのは誰よ？ 奥さんはいないんでしょうね」

「あたりまえだ。いる時に呼べるか」

「雄一という人は？」

「もうすぐここへ来る。京子もいないし、話したいこともあるから泊まっていけと言っている。めずらしいことじゃない」

「それは好都合だわ。じゃあお酒でも飲んで寝てしまいなさい。朝までに暗示をかけておくわ。あなたも明日起きたら私のことはすっかり忘れてるわ」

「雄一はいつ死ぬんだ？」

「今聞いても朝には忘れてるわ。それに知らない方があとで記憶を消しやすいのよ」

「しかし・・・」

インターフォンが鳴った。

「おやすみなさい」

ヴェー又スが軽くキスして姿を隠した。もう後にはひけない。

「よく来たな、雄一」

「泊まりに来るのも久しぶりですね」

「まあ上がれよ。いいブランデーがあるんだ」

末期の酒か・・・あまり酔っぱらってもいけないが、これが飲まずにいられるか。

「先輩、お話は？」

「いや、あとにしよう。自治区設立申請から俺の調子が悪かったこともあって、あまり話もできなかった。今日は昔話でもしながらゆっくり飲まないか？」

「いいですね。昨日先輩が元気になったと聞いてこれは飲まなきゃ、とっていたんですよ。仕事なんか明日にしましょう」

明日だと？ 雄一、明日にはおまえが命を絶つ日が決っているんだぞ。

「雄一。今まで本当に世話になったな」

「何言ってるんですか、お互い様ですよ。またいっしょにやりましょう」

すまん、雄一。きつとそれはできない。泣きたい。しかし泣けない・・・重く、苦しい時間が過ぎていった。

「そろそろ寝ようか、おまえは俺の部屋を使ってくれ。俺は京子の部屋で寝るから」

「ええ、また明日。おやすみなさい」

重い足をひきずって京子の部屋にはいる。涙が止まらない。やはり俺は雄一が好きだ。でももう戻れない。祈るしかない。雄一、すまない。神など信じないが今日だけは祈るしかない。祈り疲れて眠るまで。おまえのために、ひたすらに・・・。

七

頭が重い、どうも、長く眠っていたような気がする。

「お目ざめですか？石倉健二さん」
えっ、ここはどこだ。

「ここはトウモロローメーカー・長期低温保存センターです」
何だっ、え？。京子は？、いや、雄一はどこだ。

「新村雄一は二〇二四年一月六日、石倉京子のホームコンサートから帰宅後、毒を飲み、自殺しました」

えっ、心を読まれている。この部屋には見覚えがない。病室のようだが、何で俺はここにいるのだ。それにこの声は？

「あなたは・・・？」

「私はトウモロローメーカー・コミュニティのメインコンピューター、テラ2です。」
テラ2だと？

「あなたは二〇五八年、七十三歳で眠りにつきました」

そうだ、思い出した。確かに雄一は死んだ。京子のコンサートで「許してください」というメッセージを花に託して。そして、それは俺がヴェーヌスに頼んで組んだことだったのだ。

「すべて思い出していただけたようですね」

心を読まれている。そうか、すべて仕組まれたことだったのだ、この俺の、記憶を呼び起こすための・・・。

「今はいつなのですか？」

「二一三四年、あなたが眠りについてから七六年がたっています。今から四四年前、眠っている人々をどのような形で目覚めさせるかを決定するためにこの私、テラ2が開発されました。あなたは『開拓派』で、太陽系外開拓団の準備ができた時点での復活を希望されていました。今年準備ができたので、私はあなたの目覚めのプロセスにかかりました。私は、あなたの自分史データベースに蓄積されているあなた自身の記録と、あなたの脳の構造に残っている実際の記憶にどこか矛盾があることを発見しました。もちろん、人は自分を美化することが普通ですから、ちよつとした矛盾が問題になることはありません。しかし、あなたの場合、親友の自殺に関する部分であったので、見過ごすことはできません。あなたがその矛盾がどこかはわからなかったのです、あなたの脳をレム睡眠の状態まで覚醒し、記憶の中を調査しました。でもわからないのです。しかしどこかおかしいということとははつきりわかったのです。何らかの暗示により、記憶を操作されているだろうと私は判断しました」

「それでデータから仮説を組み立て、レム睡眠状態の私の脳に刺激を与え、夢の中で過去を追体験させたというわけですか」

「さすがわかりが早い。一旦消されたあなたの記憶が過去を追体験することによってよみがえったわけです。あなたは・・・罪人です」

深い後悔が沸き上がってきた。しかしもう遅い。俺は確かに雄一の自殺に大きなショックを受けた。その反面チャンスがきたとも思ってしまった。そんな下衆な思いを打ち消そうと必死に仕事をし、京子に尽くし、周囲に認められ、充実した人生を送った。俺は自分の生きざまに満足した。しかしそれはお芝居だった。そうとも、自分で組んだサル芝居だったのだ！ 何ということだ。

「私は罰せられますか？」

「もちろん。あなたは大きな罪を犯した。そして罰を与えられていない。あなたに大きな罰を与えるのはトウモロローメーカーの責任である」

何と恐ろしい。俺はトウモロローメーカーで最も大きい罪を犯したのだ。そして、それはいま、このコミュニティの知るところとなった。

「それは・・・見せしめですか」

「もう今はその言葉は死語になりつつあるが、そのようなものだ」

「助けてください・・・お願いします・・・」

せいっぱいの哀願調で訴えた。答はわかっているくせに。

「もちろん、それはできない。」

「京子は？ 京子はどうしたのですか」

「あなたはそれを知ることができない」

「助けてくれ。京子、助けてくれ！ お願いだ！」

叫んでも無駄だ。分かっている。でも叫ぶことで少しは恐怖が和らぐかもしれない。ただそれだけだ。

魔女に魅入られた者は、やはり地獄に行く運命だったのだ。

終章 (苦しみの果てに・・・)

長い間、健二は苦しんでいた。「十字架上の左手の罪人」これが彼に課せられた罰の形だった。教会は残っていた。雄一が予測した「アート派」の世界は実現し、この教会も歴史のまま残ったのだ。十七世紀に作られた美しい十字架上のイエス像がそこにあり、その隣に健二はかけられた。長い痛みと渴きと飢えが彼の罪をあがなうまでそこにかかけられるのだ。人々は彼を見て、人間の罪深さに想いをはせ、祈ることだろう。

礼拝が行われていた。健二はそれが毎日か毎週なのかすら分からなかった。ただ苦しんでいた。長い苦しみを経て、彼は少しずつ「本当に」祈ることを覚えて行った。司祭の言葉や修道女の弾くオルガンの音がそれを助けてくれた。健二は少しずつ自分の苦しみが透明になっていくのを感じた。特にオルガンの音が自分の罪を浄化してくれるように感じ、修道女に感謝の言葉を述べた。口をきくのはものすごくつらいことだった。のどに、首筋に激痛が走った。しかし述べずにはいられなかった。修道女のオルガンに感謝を捧げることが、苦しみの中で男の日課になっていった。

はてしなく長い苦しみの日々は続いた。身体の痛みは続いていたが、健二はもうあまり苦しみを感じていなかった。オルガンを聴くたびに自分自身が浄化されるのをはつきり感じていた。

ある日、修道女がミサでもないのに教会に来た。そして健二に深々と一礼し、オルガンに向い、聞いたことがない曲を弾き始めた。美しい曲だった。力強い曲だった。すっかり涙など乾いているはずなのに、彼は涙があふれるのをはつきりと感じた。意識が遠のいていく。健二はついに死ぬことができるのだらうと感じ、最後の力をしばり、確信をこめて

修道女にむかって言った。

「京子、ありがとう」

健二は十字架から降ろされていた。すでに目も見えず、口をきくこともできなかつた。手足の感覚はすでになくなっていたが、手が誰かの手とつながれているのはつきり感じた。それが京子であることを健二は確信していた。かつて彼に罰を宣告した声が聞こえてきた。

「石倉健二、君の罪はあがなわれた。おめでとつ」

「君が感じているように、君の横には石倉京子がいる。君も知っているように、彼女は新村雄一のとを継ぎ、『死』の音楽を探求した。そして、眠りからの再生にあたり、オルガンストとなり、『再生』の音楽を探求し、創造した。君はそれを苦しみの中で聴いたのだ。そうだったのか。」

「君の罪を知り、大変なショックを受けたが、その罪を浄めるためにも究極の『再生』の音楽を創りたいと願ひ、君がかげられていた教会でオルガンを弾いていたのだ。いまや、彼女の音楽は地球に人間として残ることを選んだ人々全員に愛されている」

京子、本当にありがとう。

「君が最後に聴いた曲。あの曲を創ったことにより彼女は自分の使命が終わったと感じ、神のもとへ帰りたいと願ひでてそこにいるのだ。トゥモローメーカー・コミュニティがアート派のコミュニティになってからもう四十年、多くの人々がアートを極限まで求めた末、宇宙の大いなる意思の存在を確信し、その意思との合一を望み、肉体の死を選んできた。石倉京子もいま、そうしたいと望んでいるのだ」

帰ろう。京子、二人で。

「石倉健二、君は選ぶことができる。君は罪を清められ、市民権を得た。開拓派で生まれ変わることも、アート派で生まれ変わることもできる。もし、宇宙の大いなる意思との合一を望むなら、このまま肉体の死を選ぶこともできる」

もう俺は十分だ。

「・・・京子といっしょに・・・、いかせてください」

「そうか、ではこれから君達を宇宙に埋葬する。もしそこに神がいれば君達を迎えてくれるだろうが、私にはわからない。」

いや、わかっている。すでに京子と俺は完全に一つになっている。肉体の死など問題ではない。帰るところは一つしかない。

「では、さらばだ」

遠ざかっていく意識の中で、健二は京子が大好きだった言葉を思いだしていた。そして彼女も同じ言葉を想っているということを知っていた。

「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは、御子を信じる者が、一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」

(ヨハネによる福音書 三章第十六節)